

# 防災教育を軸に共生社会で主体的・自発的に 行動できる人間の育成を目指す

— 兵庫・県立 <sup>まいこ</sup> 舞子高校 —

阪神・淡路大震災の教訓を生かすために設置された、舞子高校の環境防災科。人のネットワークを駆使して外部と連携し、生徒に多彩な体験をさせる同学科の実践は、防災教育の枠を超え、あらゆる学科に求められる人間教育のヒントになりそうだ。

取材・文／藤崎雅子

## ● 実践のKeyword

- 防災教育
- ボランティア活動
- 校外学習
- 外部講師
- 国際交流
- 地域貢献

### 被災地の宮城で4週間 生徒がボランティア

全国唯一の防災の専門学科「環境防災科」をもつ兵庫県立舞子高校の生徒が、5月上旬から4週間、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた宮城県東松島市でボランティア活動を行った。参加したのは、環境防災科の全学年と普通科の希望者、計145人。4回に分かれて1週間交代で被災地で活動した。

兵庫県教育委員会の地域貢献事業の一環として話がかもち上がったから生徒を送り込むまで、準備期間はわずか1カ月程度。費用や物資がそろわないまま派遣を決めたが、活動資金をはじめ、毛布や寝袋、マスク、無洗米…、さまざまな物資が多方面から次々と同校に届いた。送り主は、これまで同校生徒や教員が関わってきた団体や地域住民だ。現地に入った生徒たちは、津波で民家や施設に押し寄せた泥をスコップで除去するなどの作業に汗を流し、被災者のさまざまな話に耳を傾けた。地域の公共施設を借りての自炊生活で、夜は体育館にて寝袋で休む毎日。環境防災科長の諏訪清二先生はこう話す。

「目的は生徒の勉強ではなく、あくまで被災者の支援。その結果として、生徒は何か学びとってくれるのではないか」

この環境防災科で学んだ生徒の行動力や主体性、意欲などが、進学先や社会で高い評価を受けている。防災の専門学科でなぜそのような力や態度が育つのか、詳しく

い教育内容から探していきたい。

### 豊かな市民力を備え 共生社会で活躍する人材を育成

同校に環境防災科が誕生したのは、今から9年前のことだ。1995年の阪神・淡路大震災の経験をもとに新しい防災教育を推進するため、2002年、普通科のみだった同校に防災の専門学科が誕生。「自然環境や社会環境を整えることから防災を考えていく」(同科担当・和田茂先生)ため、環境防災科という名がつけられた。

同学科が育てたいのは、防災の専門家ばかりではないという。生徒に望む3つの目標があり、その1つは自分の命を主体的に守ることのできる「サバイバーとなる」ことだ。2つめは、多くの人がボランティアに駆けつけた阪神・淡路大震災の経験を踏まえて、人を支えることのできる「サポーターとなる」こと。そして3つめが、「市民力をはぐくむ」ことだ。阪神・淡路大震

## 図1 環境防災科の教育理念

- 阪神・淡路大震災の教訓を生かし、自然環境や社会環境との関わりの中で防災教育を行うことを通して、共生社会における人間としての在り方や生き方を考えさせる
- 大学をはじめとする様々な研究機関と連携して実践的・体験的な学習を行うことで、環境防災に関する課題の解決に向けて、主体的・自発的な考えをもって行動できる人間の育成を目指す
- 自然現象のメカニズムや災害と人間社会の関わり等の学習等を通して、自己を取り巻く様々な環境に対する理解を深め、災害に対応する力を身につけるなど、地球規模で考え地域で活動する(Think Globally, Act Locally)人間の育成に努める



### School Data

普通科・環境防災科 / 1974年創立  
 生徒数 868人(男子464人・女子404人)  
 進路状況(2010年度実績) 大学75.6%・短大4.5%・  
 専門学校16.5%・就職その他3.3%  
 兵庫県神戸市垂水区学が丘3-2  
 TEL 078-783-5151  
 URL <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maiko-hs/>



### Outline

1995年の阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市西部に位置。震災後、災害時非常用電源として太陽光発電システムが導入され(写真右上)、市民救命士講習や防災の事例集づくりに参加するなど防災教育に取り組んでいた。そうした活動が下地となり、県が「命・助け合い・思いやり」をテーマとした新しい防災教育を推進するなか、全県的な高校教育改革のひとつとして2002年に環境防災科が設置された。

災の際、トラックの運転手はがれきを運び、教員は避難所で人間関係の潤滑油になるなど、それぞれが得意とする分野において力を発揮した。このように豊かな市民力があれば、防災の専門家でなくても災害時に貢献することができるといえる。

生徒の入学理由も、防災そのものへの強い関心ばかりではなく、「ボランティアに興味がある」「大学の先生の授業があるのは珍しいから」など多様だ。

「それぞれの好奇心や興味をもとに、多彩な活動で刺激を受けながら自分なりの目標を見だし、各分野で頑張ることのできる市民のリーダーが育ってくればと思っています」(諏訪先生)

**身近なテーマとの関連で各分野にアプローチ**

同学科のカリキュラムは、3分の1が防災に関する専門科目で構成されている(図2)。全国に例のない学科のカリキュラムづくりは白紙に絵を描いていくようなものだが、その中心となったのは、「災害に関して特別な知識があったわけではない」という英語教師の諏訪先生ら、2人の教員だ。防災に関する書籍を読みあさり、防災関係の会議やイベント、セミナー、ワークショップなどに手当たり次第参加。授業方法の参考のために、小中学校の総合学習を視察・研究した。そうして見えてきた防災教育に必要な要素をリストアップして単元とし、単元を組み合わせて

図2 専門科目の授業内容

学年	科目(単位)	内容
1年	災害と人間(4)	阪神・淡路大震災を多角的に検証することで、命の大切さ、人とのつながり、助け合いの重要性を理解する。また、「環境防災」の概念を理解したうえで、自然環境・社会環境から「防災」との関わりについて理解を深める。大学や関係機関から招く外部講師による講義や、校外学習などの実践的・体験的な授業とともに、レポート、発表、ディスカッションなどを行い、生徒同士や自己の評価を行う授業も並行して行う。
	自然環境と防災I(2)	人間活動に伴って生じる環境問題を正しく理解するために化学の基礎的な知識を身につける。また、実験・観察を通して自然科学的なアプローチをし、環境問題の原因、現状、メカニズムそして保全方法を考える。
	環境と科学(2)	神戸という地域性を生かしながら、防災を自然科学の視野から学ぶ。具体的には、兵庫県南部地震に象徴される地震災害、阪神大水害に象徴される気象災害を、その仕組みから学習することによって、その現象を正しく理解し、将来被害を及ぼしそうな現象に対して、適切な判断のもとに冷静な行動ができることを目標とする。外部講師を招き、「六甲山フィールドワーク」や「人と自然の博物館」見学などの校外学習も実施。
	防災情報I(2)	防災に関するテーマに対して、インターネットを活用して情報を収集・取捨選択し、問題解決する力を養う。また、それらの授業を通して、情報リテラシーの向上、インターネットの活用能力を身につける。情報を受けるだけでなく、プレゼンテーションソフトやwebによって情報を発信する能力を身につける。
2年	アクティブ防災II(2)	[ネパールとの交流]現地で行われている「地震に強い学校づくり」から、地域防災の大切さや途上国の知恵を学ぶ。カルチャーボックスを作り、日本の文化や流行を英語で紹介する。[長田のまち歩き]長田を歩いて、震災復興の意味を考える。事前学習・まち歩き、レポート作成、発表というサイクルを通して、課題発見・解決型の学習方法を身につける。[英語]防災に関わるさまざまな英文を読み、締めくくりとして Total Disaster Risk Management(総合的な防災戦略)を学ぶ。
	自然環境と防災II(2)	「自然環境と防災I」に続き、化学の基礎的な知識を身につける。人間活動に伴って生じる環境問題について、実験・観察を通して自然科学的なアプローチをし、環境問題の原因、現状、メカニズムそして保全方法を考える。また、データ処理の手法を身につけ、自分でデータ解析ができるようにする。
	社会環境と防災I(2)	社会環境と防災の関わりを学ぶ。はじめに災害ライフサイクルのなかでさまざまな分野の人々がどのような行動をとるべきかを考え、その後、「耐震」「ボランティア」「まちづくり」などをキーワードに市民の立場から防災を考える。建築家や大学教授を招いた授業も実施。
	環境と科学(2)	1年と同様
	環境防災講読(2)	環境防災に関わるさまざまな文章や講義を通して「文章講読力」をつけるとともに、「自分自身の生き方」「命の尊さ」について考える。
3年	卒業研究(2)	環境防災に関わるあらゆる分野から自分の興味ある分野を研究し、論文やプレゼンテーションスライド、ビデオ、絵本、冊子、模型、ゲームなどにまとめる。これまでは、幼少期に受けた阪神・淡路大震災を記憶の底から掘り起こし、体験集「語り継ぐ」にまとめた。
	社会環境と防災II(2)	社会環境と防災の関わりをより深く学び、総合的な防災のあり方を考える。「架空のまちの防災体制づくり」といったシミュレーション的な学習を通して、社会環境と自然環境の両方の知識の融合と、防災の知恵を身につける。自然災害だけではなく、戦争や紛争、原子力、事件、事故といった人為的な災害についても学び、「安全」で「安心」な社会の姿を追求する。
	アクティブ防災II(2)	環境防災と自分の夢との関わりを調べ、進路を具体的に考える。同じ夢、進路をもつもの同士の研究を行い、発表。時事的な災害について考え、災害についての英文を多読する。
	人と社会(2)	「人間」とは? 「社会」とは? 「環境」とは? 「どうやって生きて行くか」「いかに生きて行くか」「愛」とは「今の環境はどうなっているか」「われわれはどう考えるのか」といったことについて、授業を通して考える。

試行錯誤しながら科目をつくっていった。この専門科目に盛り込まれているテーマは大きく4つ。災害を引き起こす可能性のある自然現象を科学的に学ぶ「ハザード」、災害発生時の避難やけがの手当て、避難所運営などができるようにする「災害対応」、災害に強いまちづくりや国際協

力など社会面からアプローチする「社会背景」、過去の事実から教訓を得る「語り継ぎ」だ。理科分野や社会科学分野を災害という観点から見つめたり、災害に関する文献や英文を講読するなど、防災という身近にある生きたテーマとの関連で幅広い分野を学んでいる。





東日本大震災の被災地、宮城県東松島市の民家で泥かきのボランティア活動をする生徒。老人介護施設や避難所も訪問し、メッセージや花を届けた。



毎年夏休みに生徒10人程度がネパールを訪問。現地校との交流や地震に強い学校づくりの視察などを行う(写真右)。東日本大震災被災地のために募金活動を行う同校生徒(写真左)。

図3 環境防災科の活動内容(10年度)

月	活動(○=校内、●=校外で実施)	内容	のべ人数
4	● 阪神高齢者・障害者支援ネットワーク	ボランティア・交流	6
	● 赤十字月間キャンペーンイベント	ブース展示・説明	15
	● 中国青海省地震募金活動	募金活動	51
	● レインボーフェスタ	発表	3
5	● 防災世界子ども会議	TV会議	3
	● 日本赤十字訪問	募金委託	3
	● 横浜市立鶴志田中学校	交流	5
	○ 四川・愛知・神戸防災教育交流プロジェクト	講義	-
	○ UNCRD来校	講習・交流	40
6	● 人と防災未来センター見学	校外学習	40
	○ 21世紀東アジア青少年	交流	6
	● 野島新層保存館見学	校外学習	40
	○ インドネシア交流	交流・ホームビジット	51
7	○ 救急法講習(ケガ)	講習・実習	80
	● 長田まち歩き	校外学習	38
	○ 中国四川高校生来校	交流	40
	● 多聞南夏まつり	ボランティア	19
	● 本多聞夏まつり	ボランティア	8
	● 明舞地区夏まつり	ボランティア	6
	○ 地域防災セミナー	講習	6
	● 藤山小学校訪問	交流	35
	○ JICA研修団来校(2日間)	講習・交流	8
	● 竹の台防災キャンプ(2日間)	ボランティア	12
8	● 姫路市防災スクール	発表	2
	● ロボット×レスキュー2101	一般参加	2
	● 多聞南夏まつり	ボランティア	7
	● 舞子山手住宅夏まつり	ボランティア	8
	● 防災学習(3回)	学習会	10
	● 佐用町訪問(3日間)	被災地訪問・ボランティア	31
	● ネパール訪問(10日間)	国際交流	9
	● 国際免疫学会	一般参加	21
	● 防災世界子ども会議(10日間)	国際会議	3
	● 消防署体験(3日間)	体験学習	9
● 垂水区子ども防災イベント	ボランティア	7	
9	○ 環境防災科体験入学	会運営補助	54
	● コーポテイズイベント	ブース展示	3
	● 兵庫県合同防災訓練	幼稚園児への防災教育	24
	● 高大連携授業	校外学習	38
	● 六甲山フィールドワーク	校外学習	40
	● イザカエワールド(2日間)	ボランティア・ブース展示	19
	● 消防学校体験入校初級	校外学習	40
	● 地域学会発表	発表	1
	● 六甲山フィールドワーク	校外学習	40
	● 奄美豪雨災害募金活動(2日間)	募金活動	54
10	● 自主防災リーダー研修	発表	5
	● 消防学校体験入校上級(2日間)	校外学習	38
	○ 環境防災科説明会	説明会	24
	● 奄美豪雨災害募金活動(3日間)	募金活動	8
	● 多聞南スタンプラリー	交流	21
	● 多聞東防災訓練	訓練企画運営参加	13
	● 奄美訪問(3日間)	訪問交流	5
	● 人と自然の博物館	校外学習	40
	○ JICA研修団来校	講習・交流	40
	● 名城大学シンポジウム	一般参加	7
11	● 兵庫県教育委員会訪問	奄美訪問報告	3
	● 安全マップづくり	小高連携授業	40
	● 防災共同学習	講習・交流	3
	● 災害支援と心のケア	一般参加	5
	○ 防災教育・訓練	発表・訓練	872
	○ 北条高校来校	交流	2
	● 舞子山手住宅もちつき大会	ボランティア	6
	● 佐用町被災調査(2日間)	訪問交流	12
	● 災害メモリアルKOBÉ	一般参加	10
	● ぼうさい甲子園	発表・一般参加	9
12	○ 震災メモリアル行事	防災イベント	872
	● 神奈川県向上高校	交流	-
	● ひょうご安全の日	校外学習	40
	● UNCRD国際防災会議	発表	1
	○ 国際交流基金来校	講習・交流	7
	● 青少年赤十字研究会	発表	3
	● トルコ訪問発表	発表	3
	● 多聞南防災訓練	訓練運営企画参加	26
	● 大カエルキャラバン	ブース展示	11
	● 小東山防災訓練	訓練運営企画参加	20
1	● 佐用竹炭祭り(2日間)	講習・交流	9
	● ひょうご防災リーダー講習	発表	8
	○ アジア防災センター	講習・交流	38
	○ JICA研修団来校	講習・交流	40
	● 神院大ディベート大会	ディベート	6
	○ 四川社会科学院来校	視察	-
	○ JICA研修団来校	講習・交流	5
	● 二葉地区カエルキャラバン	ブース展示	20
	● 本多聞まち歩き	交流	3
	2	● 中国四川訪問(8日間)	国際交流
● 東日本大震災募金活動		募金活動	2
● ジュニアプラス・トップコンサート		ブース展示・防災寸劇	23
● 東日本大震災募金活動(春休み中)		募金活動	586
● 東日本大震災募金活動(春休み中)		募金活動	586

防災科目を担当する15人の教員は、いずれも国語や数学など一般科目の教員だ。最初から防災の知識や経験が豊富なわけではなく、外部講師の力を借り、チームティーチングで互いに学び合いながら授業を行っている。また、そこで得た知識や経験は、普通科の授業にも反映されるという。家庭科の教員が普通科でも被災地の食支援を学ばせたり、音楽の先生がボディーパーカッションによる心のケアを扱うなど、防災を切り口とした授業の工夫が広がっている。

感じしてほしい。それには被災地で温度や臭いを感じながら支援する体験、あるいは被災者の話を通じての代理体験など、リアリティのある体験が必要だ(諏訪先生)。

具体的に授業内容を見てみると、1学年の科目「災害と人間」では、毎時間、電力会社や水道局、ボランティア団体、大学から講師を招き、阪神・淡路大震災の経験を語ってもらう。2学年の「アクティブ防災」では震災の被害の大きかった神戸市長田区のまち歩きを行い、復興のあり方について考える。こうした体験活動後は、意見交換やレポート作成、発表なども実施。意見や感想を交えてわかりやすい言葉で発表する力を磨いている。

訪問や、四川大地震の被災地訪問など、海外との交流も活発だ。卒業生が進んだ大学の先生から、「舞子出身の学生がゼミを引っ張ってくれる」とよく言われるというが、国内外を舞台にさまざまな体験を重ねていくなかで、生徒は理解力、判断力、表現力を身につけていくようだ。

また、どこかで大災害が発生すると、同校はすばやく動く。3月に東日本大震災が発生するや、翌週には街頭で募金活動を始めた。授業で「想定」学校「心のケア」「命」などのテーマごとに、新聞記事等を使って被災の実態を多角的にとらえて、デイスカッションしたり、冒頭のようなボランティアにも駆けつけた。これまでも新潟県中越地震や能登半島地震などで大きな被害を受けた地域で、ボランティア活動を重ねている。

授業をはじめとする環境防災科の教育の大きな特徴は、リアリティのある体験が数多く盛り込まれていることだろう。「例えば『命は大切だ』思いやりはすばらしい』と言葉として知るのではなく、心で

さらに、防災関連の会議やシンポジウムへの参加、地域イベントへの協力、小学生への防災指導など、多彩な課外活動を用意(図3)。希望者を対象とした、地震に強い学校づくりの啓発をするためのネパール

「生懸命働いて、被災地の皆さんに心から『ありがとう』と言ってもらえることは、彼



環境防災科担当  
和田 茂先生



環境防災科長  
諏訪清二先生

らにとって一番の褒め言葉。自分は人の役に立つことができる、という自己肯定感がぐんと上がります」(諏訪先生)

### 多岐にわたるネットワークが 国内外での活動を支援

諏訪先生が「つながりのなかで生きていく学校」というように、こうした多彩な体験活動はNGO、大学、行政、マスコミなど多岐にわたる人のネットワークの上に成り立っている。そこで生徒は多様な分野で活躍する大人と出会い、それぞれの価値観に触れ、意欲や態度、進路希望に影響を受けることもあるという。

このようなネットワークは学科設立当初からあったわけではなく、活動を通じて少しずつ広がってきた。ネットワーク化のきっかけは、全校生徒が参加して防災について考える毎年恒例の行事「1・17震災メモリアル」だ。これは被災者による語り部グループや大学教授、他校生を招いて、震災時のようすを聞いたり防災活動について話し合うもので、学科設立が決定した00年度に始められた。その際、半分は断られることを覚悟して各方面に参加依頼したところ、経験や教訓を高校生に伝えたいと全員が集まり、関係をつくることができた。

そして行事後、今度は逆に参加者から同学科生徒に対し、防災関係のイベントや会議で声がかかるように。「教育効果が見込めればなるべく断らない」(諏訪先生)とのスタンスで受け入れるうち、ネットワーク

は雪だるま式にふくらんでいったという。宮城のボランティアに際して支援金や物資を送ってくれた地域団体は、防災イベントに生徒が協力したことから関係ができた。毎年実施されているネパール訪問も、ある防災イベントにパネリストとして参加した同校生徒がネパールのNGOの目に留まり、声をかけられて始まったものだ。

### 普通科にも広がる 自ら行動しようとする「思い」

諏訪先生は同学科の生徒に、「何かが起これば自ら行動しようとする『思い』が育っている」との手応えを感じている。思いや行動力を卒業後も伸ばし続ける者が少なくなく、今年度、30人ほどの環境防災科卒業生と諏訪先生とで防災の勉強会が立ち上がった。ある卒業生は、在学中のネパール訪

問がきっかけで途上国に興味をもち、大学進学後に防災教育を推進する若者グループを立ち上げて活動。現在はJICAの青年海外協力隊員として、エルサルバドルで防災意識の普及啓発に取り組んでいる。

また、こうした思いをもつのは、環境防災科の生徒だけではない。総合学習や選択科目、学校行事で防災を軸に共生社会について考える機会に恵まれた、普通科の生徒にも広がっているようだ。東日本大震災被災者のため春休みに同校生徒が行った募金活動は、生徒会副会長を務める普通科の生徒の提案により始められたものだ。学科を問わず、のべ600人近い生徒が街頭に立って募金を呼びかけた。そんな思いを大切に生きる生徒を一人でも多く育てることを課題に、今後も学校全体で取り組んでいくという。

災害は世界各地で発生し続け、われわれにさまざまなメッセージを語りかけている。東日本大震災を受けて、諏訪先生はこう話す。「今回、津波や原発の危険性の想定を上回る災害が起こり、世間で正しいといわれていることが根底から揺らいでいます。技術の進歩ですばらしいシステムができて、それを動かしているのは人です。人をきちんと教育していく重要性を改めて感じました。言われたとおりに動くのではなく、批判的な目をもって情報を集め、臨機応変に判断、行動できる人を育てていかなくてはならないでしょう。『これが大切だ』と価値の存在を教えるだけでなく、価値を発見するプロセスを体験させるような教育も必要かもしれません」

人のつながりが注目された阪神・淡路大震災の教訓をもとに生まれた環境防災科。今後も現実社会から教訓を学び取り、教育内容に反映させていく。

### Interview



環境防災科3学年  
谷 勇也さん  
(写真左)  
みぎわ  
阿部美汀さん  
(写真右)

### 東日本大震災の被災地とかかわって

「ぼくは中学生のころから消防士になる夢があったので、環境防災科からは消防士がたくさん出ていると聞き入学しました。1年と2年の時、校外学習で消防学校に体験入学してみて、その希望がいっそう強くなっています。

東日本大震災後に宮城の被災地へ行き、津波の被害の恐ろしさ、避難生活のたいへんさを目の当たりにしました。小中学校の泥かき作業をさせてもらったのですが、校内はあらゆるものが泥にまみれ、泥は油を含んで今まで見たこともないようなドロドロした状態で、においもきつかったです。体育館倉庫のマットは水分を吸ってものすごい重さで、運び出すのに10人以上の手が必要でした。

今回のボランティアで現地の小中学校と関係がもてたので、卒業してからも行って話ができたらと思います」(谷さん)

「今年の1月、神戸市で開催されたぼうさい甲子園で、岩手県釜石市の中学生と知り合いになりました。

東日本大震災から9日後、その子から携帯電話にメールをもらったんです。自宅が津波で流されて避難所で暮らしているとのこと、被災地の状況を写真で送ってくれたり、ニュースであまり報道されていないような避難所生活の実態も教えてくれました。私からは『ずっと応援しているから』というメッセージを送り、何度もメールをやりとりしています。

自分の将来については、航空関係や心理学系などいくつか興味があってまだ決まっていますが、防災にはずっとかかわっていきたいと思います」(阿部さん)